



Katharina BOEHM,
*Charles Dickens and the Sciences of Childhood:
Popular Medicine, Child Health and Victorian Culture*
(x+236 頁, Basingstoke: Palgrave Macmillan,
2013 年, 本体価格 £55.00)
ISBN: 9781137362490

(評) 川崎明子
Akiko KAWASAKI

A Christmas Carol (1843) に登場する病弱な Tiny Tim の名は、現在英語圏の多くの小児科病棟・病院のチャリティに使われている。ディケンズと小児科学の関係は深い。小児科学はディケンズが活躍した 19 世紀中期にちょうど医科学の一分野として確立中であった。ディケンズは子供に関する知のせめぎ合いに立ち合い、大いに巻き込まれ、自ら新しい子供像を発信した。科学者たちも、彼の子供の作中人物たちを自説の証明に利用しようとした。ディケンズは実生活でも子供の健康に関心を寄せる環境にあった。2 歳の時に弟の Alfred が、10 歳の頃に妹 Harriet が病死した。自身も小さくひ弱な子供で、慢性的に「強い痙攣の発作」に襲われた。成人後は、父親として 10 人の子の病気につき合い、1851 年には生後 8 か月の第九子 Dora Annie を「突然の痙攣」で失った。著者がいうとおり、ディケンズほど子供の概念形成に影響を与えた 19 世紀の小説家はいない。にもかかわらず、ヴィクトリア朝の子供をめぐる科学思想とディケンズ作品の関係解明は進んでいなかった。この未開拓分野の調査が、本書の目的である。

第 1 章 “Experimental Subjects: *Oliver Twist* and the Culture of Mesmerist Demonstrations” は、*Oliver Twist* (1837-39) を中心に、ディケンズとメスメリズムの関係を探る。ドイツ人医師 Franz Anton Mesmer (1734-1815) は、催眠術を施す際に、施術者から被術者に、生物が持つ何らかの磁気を帯びた液体、すなわち動物磁気 (animal magnetism) が流れると仮定し、これを利用して身体への作用を引き起こそうとした。その欧州大陸での流行は、1830 年代から 40 年代にかけてイギリスに上陸した。イギリスにおけるメスメリズムの中心的擁護者の一人が、ディケンズの友人で一家の主治医の John Elliotson (1791-1868) であった。ディケンズの興味は 1837 年に始まり、公開実験を見学するだけでは飽き足らず、自ら施術を試みるに至った。施術者と被術者の知的能力差が大きいほど動物磁気の操作が容易になると考えられたために、子供はメスメリズムの効力を証明する理想的な被験

者であった。

ディケンズはこのメスメリズムの流行を背景に *Oliver Twist* で子供時代という主題を選択し、受動的な科学情報の源としての子供という概念を利用して、社会批判を行い、語り手と読者の関係を構築し、メロドラマの美学を実践した。例えば、病院の公開実験室で医師が子供を操作してみせたように、小説は繰り返し Oliver の身体や感情を劇的に視覚化し、読者にその正しい解釈を促す。医師たちも、文学を理論の正当性の証明に活用しようとした。例えば Elliotson は、*Oliver Twist* 出版以前からのことではあるが、自著で文学作品を大いに援用し、また講演では、主題は死刑についてで、実際は William Hazlitt のエッセイの一部であったが、「我が友ディケンズ」の *Oliver Twist* からとして引用を行った。

続く第2章 Hothouse Children: *Dombey and Son* and Popular Medical Child Health Manuals は、1840年代の子供に関する医学書と一般読者との関係を、特に友人 Elliotson の *Human Physiology* (1835) と *Dombey and Son* (1846-48) を題材に検討する。1830年代から40年代にかけて、子供の健康マニュアルの出版が急増し、一般読者にもよく読まれた。これらの指南書ではしばしば、子供の病気の探求や当時形成期にあった小児科学が、未知なる土地の探検や建設まもない植民地に喩えられた。小児科学においては、子供の疾病と大人の疾病の相違が強調されると同時に、病気の子供と「野蛮な」人種の相似が示唆された。専門家と素人の両方が子供の疾病と障害を定義しようとしたこの時期、ディケンズは特に、人種や種の境界が曖昧になる時期として子供時代を探求する。

Dombey and Son における子供像には、ローザンヌに滞在中の1846年に、視覚障害者施設で観察した10歳の少女の影響がある。ディケンズはこの愛らしい少女の「野蛮」な態度に、*Human Physiology* で説明される、成長が止まった子供の病理状態と、異国的な風貌の一例を見出した。Blimperの学校の生徒たちは、自然な成長速度を妨害された子供が、先祖帰りをする可能性があるという医学理論を体現する。また、イギリスで流行した温室 (hothouse) を、字義的・比喩的な子供の発達上の要所に設定し、語彙の通り温室育ちの生徒たちが早期英才教育を受ける様子を描く。ディケンズは当時教育論でよく用いられた植物学的概念を駆使し、子供たちを「野菜」に退化させる異常な教育法を示し、その様を王立キュー植物園で人工管理される大英帝国の各地から収集された植物の像と重ねることで、グローバル化したイギリス社会を喚起する。

第3章 Dickens, the Social Mission of Victorian Paediatrics and the Great Ormond Street Hospital for Sick Children は、1852年にロンドンに開院したイギリス初の小児科病院 the Great Ormond Street Hospital へのディケンズの貢献を確認し、社会改革の一環としての小児科病院の文化的意味付けを探る。19世紀前半、欧州大陸

では既に小児科病院が次々に開院していたが、イギリスでは家族の領域への干渉を嫌う政治的風潮により、本格的な医院がなかった。設立は医師 Charles West (1816-98) の尽力と、彼の呼びかけに応じた裕福な私人の援護者たちにより実現した。人々は、当院の慈善事業に携わったり、新聞や雑誌で当院について読んだりすることを通して、小児科学の理論に触れ、この分野の確立を目撃することになる。

病院と所縁のある文学者としては、*Peter Pan* (1904, 1911) の著作権を当院に寄付した J. M. Barrie (1860-1937) が有名だが、ディケンズも深い関係を持っていた。共に *Urania Cottage* を設立した Angela Burdett-Coutts は後援者であったし、義理の弟で建築家の Henry Austin は立地や改築計画の確認に携わっていた。1858 年には第一回年次晩餐会の司会を務めて寄附金を集め、病棟増築実現に一役買った。その後名誉理事となり、*Christmas Carol* のチャリティ公開朗読も行う。こうして当院とディケンズの関係は世に知られ、病院側は彼の知名度とその子供の登場人物を利用して、小児科病院の意義の理解や寄付金募集を促進しようとした。貧民学校や救貧院には不信を露わにしたディケンズは、家なき子供たちの家庭的で更生的な受け入れ場所という当院の中産階級のイデオロギーには肯定的であった。実際 *Our Mutual Friend* (1864-65) の孤児 Johnny は小児科病院で安らかに死んでいく。また *Bleak House* (1852-53) でも、当院の入り組んだ内部構造を思わせる荒涼館は、天然痘らしき疾病に罹患した Jo にとって道徳的病院の様相を帯びる。

第 4 章 *The Feelings of Childhood: Dickens and the Study of the Child's Mind* は、1850 年代から 1860 代にかけて高まった子供の精神への関心と、ディケンズの小説やエッセイにおける子供の感情の複雑な扱いを吟味する。児童心理学や児童精神医学が確立する 19 世紀末以前の数十年間、子供の内面がより科学的に研究されるようになった。その際子供の集合的な精神の傾向、特に感情に注目が集まり、大人はいかに子供の感情を正しく把握できるかが問われた。児童精神の医学的研究の推進者の一人が、ディケンズも何度も顔を合わせた the Great Ormond Street Hospital の設立者 Charles West である。Charlotte Brontë の *Jane Eyre* (1847)、William Wordsworth の *Prelude* (1850)、William Makepeace Thackeray の *Henry Esmond* (1852) が出版され、文学界も子供の内面を探求する中、ディケンズの考察は幅広く複雑なものであった。

子供の感情を理解するには自身の子供時代を思い出すのが有効であるという考えのもと、児童心理の探究においては、記憶のメカニズムが一焦点となった。しかし *David Copperfield* (1849-50) や *Bleak House* では、語り手兼主人公の David や Esther が現在の自分と子供時代の自分の断絶を認識し、自伝が大人の語り手による記憶の再構成に過ぎないことや、子供時代の純粋な回想が困難であることが示

唆される。ディケンズは記憶の他にも、子供の想像力や恐怖と不安にも強い関心を寄せ、‘Uncommercial Traveller’ (1860, 1863) で、子供が夜味わう恐れは想像力の一症状であること、大人を子供時代の感覚に引き戻す最も強力な感情は恐怖と衝撃であることを提示した。同作品は、旅人の個人的な子供時代の回想とともに、読者と共有するような共同体的記憶も扱う。例えば ‘Dullborough Town’ (1860) では、厳密な地理的詳細が差し控えられることで、この町名は不特定多数の読者の故郷を指示しうる。どこにでもあるイングランドの田舎町は、Robinson Crusoe の無人島とともに、子供をめぐる二大トポスとなる。Robinson の島は永遠の子供時代を保障するネバーランドであると同時に、大英帝国の拡大を示唆し子供に愛国心を教える役割を果たす。自ら植民地移住を推進したディケンズは、インド大反乱が起きたこの頃、個別的回想の対象のみならずイギリス人の幸福な集団的文化遺産としても、子供時代を扱ったのである。

第5章 *Monstrous Births and Saltationism in Our Mutual Friend and Popular Anatomical Museums* は、*Our Mutual Friend* におけるディケンズの跳躍進化説的価値観とその発展的意味づけを探る。Charles Darwin の進化論が、新種は極めて遅い速度で途方もない時間をかけて自然淘汰の結果形成されると考えたのに対し、跳躍進化説においては、新種は突然変異や発達停止により突如跳躍的に出現すると仮定した。19世紀中期には、娯楽と教育を兼ねた「奇形」(monstrosity) ショーが繁盛し、解剖博物館が数多く開館した。国内外から集められた平均から逸脱した身体的特徴を持つ人間や人体模型は、跳躍進化説の正しさを物質的・可視的に証明するかに思われた。跳躍進化説は、このような展示を通して、世間一般に幅広く浸透した。ディケンズも、フィレンツェで解剖学の展示を見たり、当時第10版が発売された Robert Chambers の *Vestiges of the Natural History of Creation* (1844) を読んだりして、馴染みがあった。さらに当説の信奉者の Richard Owen とは知り合いであり、雑誌編集者としても異形の人物への社会的関心を扱った。

既に指摘されているように、ディケンズは *On the Origin of Species* (1859) を所有し、作品にも Darwin の進化論的発想を盛り込んでいる。しかし *Our Mutual Friend* を、広義の子供の存在に注目して読んでみると、むしろ跳躍進化説を肯定し、期待を込めた意味さえ付与していることがわかる。ダーウィンの理論では、生物は特徴を次世代へ遺伝的に伝達するが、小説に登場する生物学上の親子は違いが目立つ。Venus の収集物の「水頭症 (hydrocephalic)」の赤子たちや、「小人 (dwarf)」の Jenny Wren や「巨人 (giant)」の Sloppy をはじめとする「奇形」的子供も、漸進的進化の枠からはみ出す。生存競争に勝てそうにない身体的特徴を有する Jenny と Sloppy はしかし、疎外されることなく元気に生き、当小説の社会批評の媒体となる。そして生物学的には無関係の人物と疑似家族の関係を構築す

ることで、特異な肉体を持つ個人の生活と共同体の要請が調和しうることが示唆される。

本書は、当時の子供をめぐる科学思想のうち、特にディケンズが直接関与したものを適切に紹介し、それらの理論にディケンズがどのような独自の意味を付与したかを、客観的に洗い出している。その上で論理的な議論展開と平易な文章で、斬新で説得力のある筆者自身の解釈を数多く提供する。子供に関する科学思想に強い興味がなくとも、ディケンズ作品の新解釈を知りたい研究者には、ぜひ一読を勧めたい。